障害児加配と担任教諭の保育における連携

飯野雄大
（首都大学東京大学院）

問題・目的　近年、幼稚園に発達障害児が在籍していることが珍しくなくなってきている。そして障害児を担当することを目的に、加配保育者が相当数配置されている。障害児に加配保育者がつくことにより、二者関係に陥り、障害児がクラス集団から切り離されてしまう危険性が指摘されている（芦澤，2011）。クラス担任とは別に保育に入る加配保育者は担任保育者やクラス集団との連携が課題となる（田中・高橋・田丸，2012）。本報告では、インタビューと保育観察を元に、発達障害児を含むクラスの事例から、主に加配保育者と担任保育者の連携を検討する。

方法　調査対象：発達障害児を含むある幼稚園のクラス　調査時期：200×年 8 月～200×＋2 年 3 月
手続き：定期的に幼稚園に出向き、保育観察を行った。その後に、当日の保育の内容やこれまでのクラスの様子について尋ねた。
事例の概要：対象児 S くん（男児）は年中クラスから幼稚園に入園した。遊びが広がりにくく、コミュニケーションが一方的であった。年中の 2 学期に巡回相談が実施され、相談機関へつながり発達障害の診断を受ける。担任保育者は 2 年間同じ教諭が担任した。対象児に障害児加配がついたのは、年長の 1 学期からであったが、年長の 2 学期に新しい加配になり、卒園まで同じ担当で継続した。インタビューは担任保育者と新しい加配に対して行った。

結果・考察

1. 対象児の経過と保育者との関係

対象児の経過	保育者との関係
前期（年中 1、2 学期） 集団活動に入るのを嫌がり、入ってもすぐに抜けてしまう。 石を電車に見立てて〇〇線と一人遊びをするなど、遊びが幼く、集団での活動ができない。クラスから出てしまい職員室に行き戻ってこないことが多い。	担任保育者と対象児が関係を形成していく。対象児の興味関心を探りながら、それに寄り添っていく。Sくんの特徴を理解すると同時に、対応の難しさを感じる。
中期（年中 3 学期～年長 1 学期） 先生や友達を強引に誘って、電車ごっこをする。気に入った友達の隣ではないと嫌がるなど対人面のトラブルが増える。 クラス全体活動に参加するが自分のやりたいことを主張し、それが終わると抜けてしまう。	Sくんの変化に伴い担任がSくんとクラス全体への対応を両立できなくなる。クラス全体も落ち着きがなくなる。集団から抜けてしまうSくんをフォローしきれなくなる。
後期（年長 2 学期以降） 集団から抜けてしまってもタイミングよく声をかけると、集団に戻ることができる。自由遊びではまだ大人の手助けが必要だが、集団で活動することが増えてきている。	加配が入りSくんがクラスの中に受け入れられるように担任と共に配慮する。加配の先生がタイミングをみて声かけをし、安心してクラスに戻れる。

2. 保育者の語りからみた連携

加配保育者がSくんを担当することにより、クラス全体をまとめる役割と、Sくんへ対応する役割をうまく分担していた。「他の子どもたちがだいぶ落ち着いてきたので、そこにSくんを入れていくことができるようになった」と語られるように、クラス全体が落ち着く中で、Sくんをクラスの中に位置づけることができるようになった。担任は「私（担任）がのんきに任せちゃう」「すぐに来るにしても来れないにしても、（加配の）先生が S くんと約束して戻ってきてくれるだろう」、加配は「あのクラス（子どもと先生）ならいつ戻っても受け入れてくれる」という互いに安心できる関係が見られた。この安心感の背景として、加配と担任が子どもの発達観や教育観を共有できている姿がうかがえた。対応について、担任自身が S くんとの関わりで感じていた葛藤を、加配保育者も同様に感じていた。また、加配保育者は S くんとクラスの子との関係を中心に、クラスの他の子どもとも関わっていた。本事例では対象児の状態だけを共有するのではなく、クラス作りを意識しながら、Sくん以外の子どもの特徴や様子を共有し、それが保育者同士の安心感となり、その上で連携が行われたことが示唆された。